

打切の間にシテは扇を抜き持つて立上り、「羊の歩み隙の駒」と一つ拍子踏み、「うつり行くなる六つの道、因果の小車の、火宅の門を出でされば、めぐりめぐれども」と、真中に於て廻る型などあり、「あぢきな浮世や」と打合（左右の手を打合すやうな型）して絶望の心を示す。この「羊の歩み……」以下は、前段が地獄の呵責の如く實に示す型の多いのに比して、詞章が夫にうらみをのべる所となるために謠の方も趣が變り、型に於ても、舞が、つた、意味の少い型がつゞく所である。それからシテの「恨は葛の葉の」シツクリした謠となり、地が「歸りかねて執心の面影の」引とると、シテは一旦シテ柱の方へ引きかけた足を引いて、ワキの方へと進み、「恥しや思ひ夫の」で、面伏せて恥しい心持を示し「末の松山千代までと、かけし頼みはあだ波の」と指し廻す型などあり「あらしなや空言や」と跡へ下り、「そもかゝる人の心か」と、扇で膝一つ打ち、恨をこめてワキを顔ばかりで見る。

それから「烏てう大をそ鳥も心して」とシテ謠ひ、地が「現し人とは誰かいふ」と引とると、左右打込開きなどの型がつゞき、「鳥けだものも心あるや」では、鳥を上へ下へに、而使ひ分けて見る型があり、「げに誠たとへつる、蘇武は旅雁に文をつけ、萬里の南國に到りしも」と遠く見やりながら出で、「契の深き志、浅からざりし故ぞかし」と、ワキへ胸指して歩み行き下に居て、「君如何なれば旅枕」でワキを見、「夜寒の衣うつゝとも夢ともせめてなど」と扇を以て下を打ち、「思ひ知らずや恨めしや」と、シツカリとワキを見、恨みの涙にくれる心で、さめくと打シオル。「羊の歩み……」から、此の「恨めしや」までの部には、「あぢきな浮世や」と、「そもかゝる人の心か」との所で三段に分れ、此の三段亦各々序破急の心持がある。

キリになつてからは、シテの心持の變化に伴ふて謠の調子も平穩靜肅となる。「法華讀誦の力にて」と、恨の一

念忽ち消え失せた心持でイウケン扇（前方で打合せた扇を、引きひらくやうにして上げる型、氣持の晴々した心持などの時によく用ひる型である）しながら立ち上り、「幽靈まさに成佛の」と角へ行き、それから「打ちし碁の聲のうち」の所までに、左へ大きく廻つて大小前に歸り開き、「開くる法の花心」と、右へ扇で指し廻り、「菩提のたねとなりけり」と仕手柱先で合掌し、返しに留拍子ふむで一曲は終る。（留は留拍子ふまずして開くのものもある）

昭和六年一月十五日印刷
昭和六年一月二五日發行

第七冊三冊の内
(非賣品)

(第十回配本)

國文學講座

全十二冊の内

語曲講義

編輯者

受驗講座刊行會

右代表者

加藤 雄 策

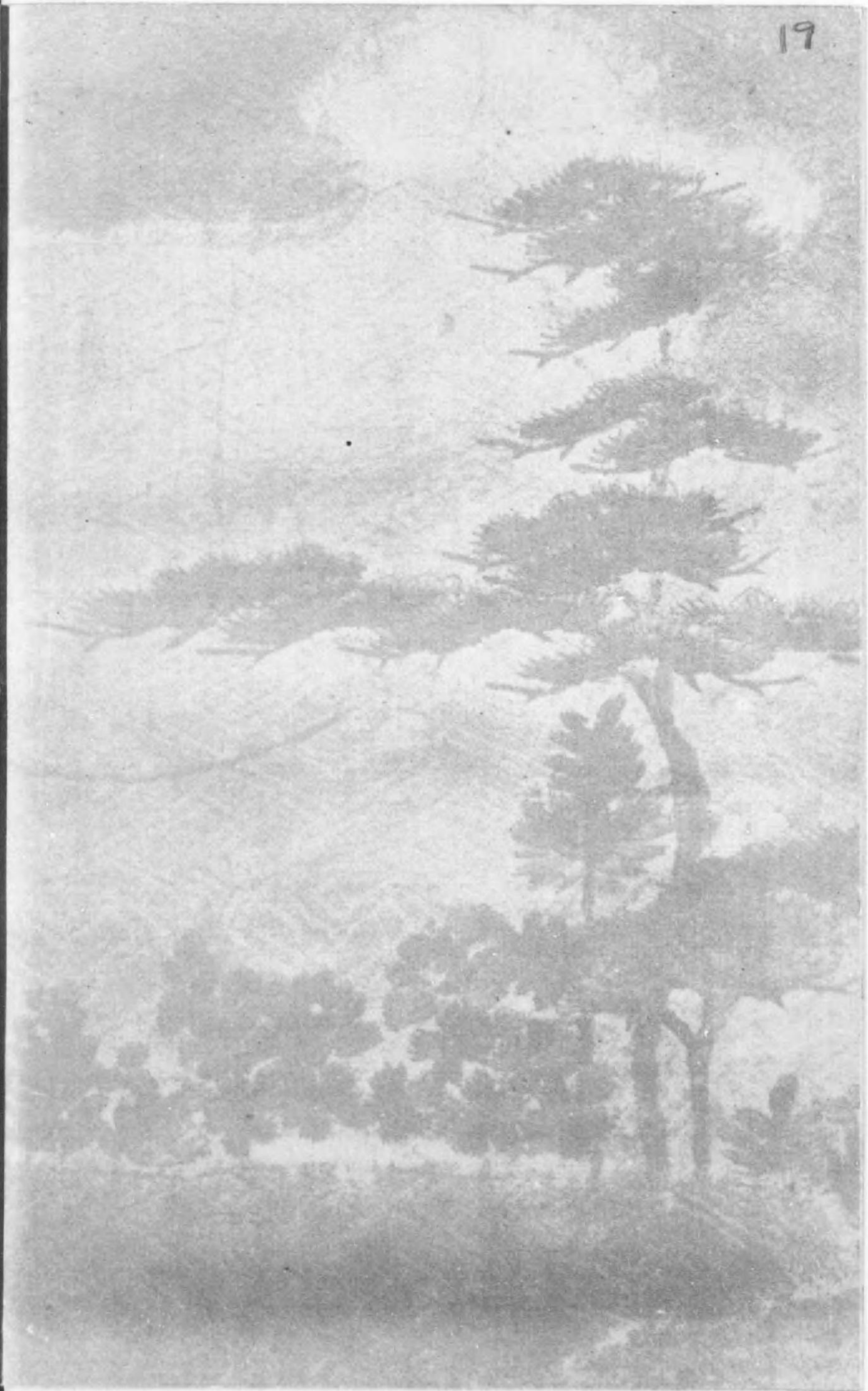
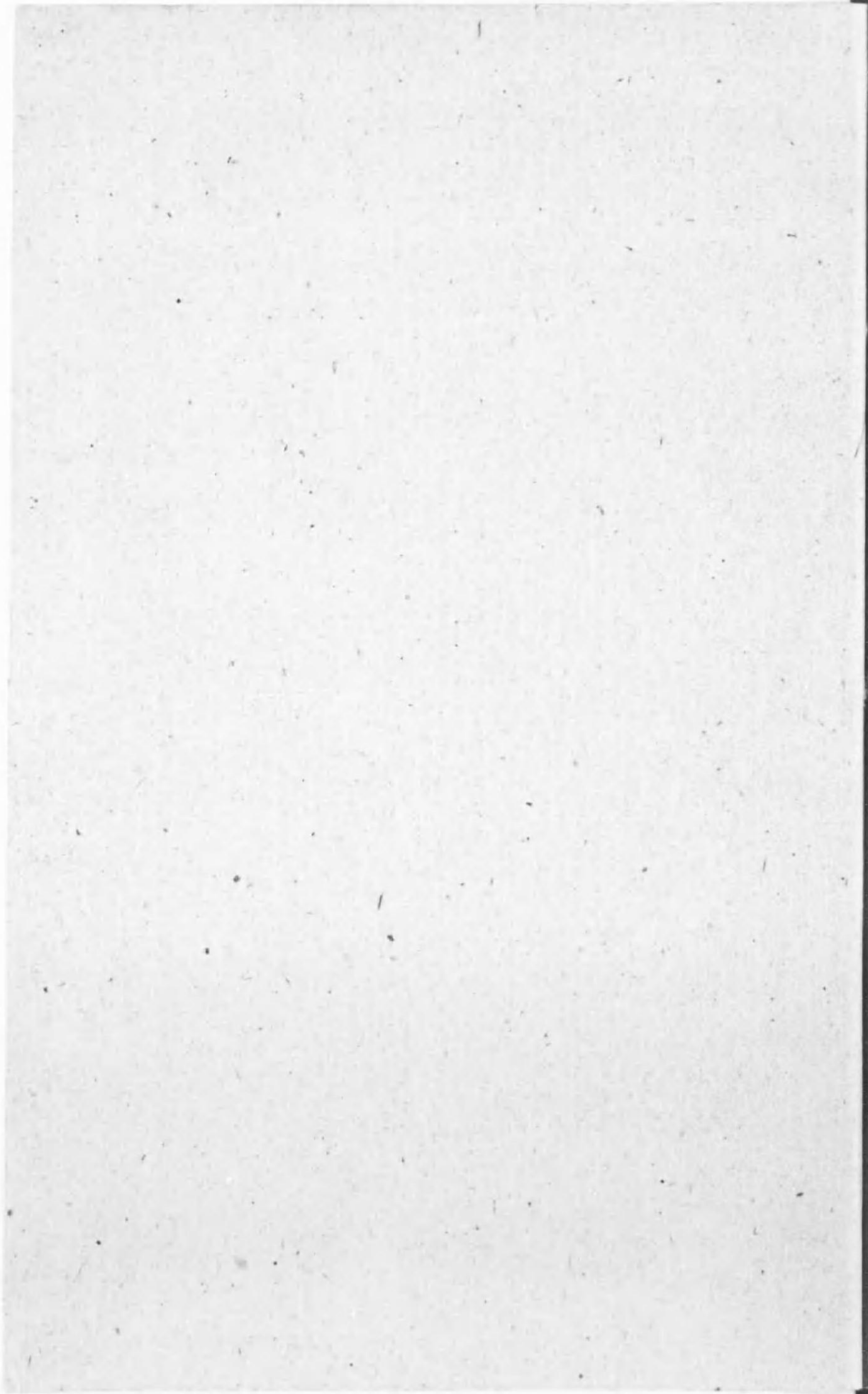
印刷者

濤川 薫
東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
株式會社平凡社内

受驗講座刊行會
振替口座東京二九六三九番



601
12

終

